

Ⅱ 道徳の教科化について

道徳の教科化

1 道徳の教科化について

《かけがえのない生命を尊ぶ》

生命の大切さは、どれだけ強調してもし過ぎることはない。すべての道徳性は、生命が大切にされてはじめて成り立つものだからである。生命を大切にし尊重することは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに素直に応えようとする心の表れである。しかし、昨今、いじめにより尊い命が絶たれるといった痛ましい事案が発生しており、今一度、生命のもつ侵し難い尊さを認識させるとともに、生命はかけがえのない大切なものであって、決して軽々しく扱われてはならないとする態度を育む必要がある。

千葉県では、「『いのち』のつながりと輝き」を主題として道徳教育の充実を図っているが、社会状況を踏まえ、これまで以上に生命の尊さについて感得し、人間としての生き方や在り方の自覚を深める道徳教育の一層の充実が求められている。

《予測困難な時代を生きる力を育む道徳教育》

また、これからの社会は、グローバル化の進展や人工知能の進化などにより、急速な変化が予想される。しかし、人工知能がいかに進化しようとも、それが行っているのは与えられた目的の中での処理である。人間は感性を豊かに働かせながら、目的を自ら考え出すことができる。また、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に合った納得解を見いだすことができるといった強みをもっている。

予測困難な時代に、変化に主体的に向き合い、関わり合い、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となるため、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながらよりよい方向を目指す資質・能力を育成する道徳教育の役割は大きい。

道徳教育に児童生徒の人格の基盤となる道徳性を養うという重要な役割があることを鑑みれば、時代背景・社会状況も踏まえ、その改善・充実に取り組む必要があるのである。

《「特別の教科 道徳」へ》

道徳教育の充実を図る観点から、平成 26 年 2 月に文部科学大臣より、教育課程における道徳教育の位置付けや道徳教育の目標、内容、指導方法、評価について検討するよう、中央教育審議会へ諮問がなされ、平成 26 年 10 月に「道徳教育に係る教育課程の改善等について」の答申が発表された。

この答申を踏まえ、平成 27 年 3 月 27 日に学校教育法施行規則を改正し「道徳」を「特別の教科 道徳」（道徳科）と改め、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正の告示が公示された。この改正では、いじめ問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善や指導方法の工夫を図ることが示された。

さらに、発達の段階に応じ、道徳的な課題を児童生徒一人一人が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する」道徳へと質的転換を図ることが示された。この「考え、議論する道徳」では、自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探究し、納得解を得るための資質・能力が求められており、年間 35 単位時間（小学校 1 年生は 34 単位時間）の量的な確保と、道徳的価値を理解し、これまで以上に深く考える授業への質的転換が必要不可欠となっている。

2 教科化のポイント

○学級担任

- ・道徳科の指導は、よりよい生き方について児童生徒が互いに語り合うことのできる環境の中で行われることが大切であり、学級の温かな心の交流があつて効果を発揮する。児童生徒一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる雰囲気を学級経営の中で創り出すことが大切である。

○検定教科書の導入

- ・道徳科の指導を行うに当たっては、「主たる教材」として教科書を使用する。また、県作成の道徳映像教材(80ページ参照)や自治体が作成している地域教材、その他の教材も適切に活用する。
※教材については教育基本法や学校教育法、その他の法令に従い、次の観点に照らし適切と判断されるものであること。

ア 児童生徒の発達の段階に即し、ねらいを達成するのにふさわしいもの。

イ 人間尊重の精神にかなうものであつて、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題を含め、児童生徒が深く考えることができ、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものであること。

ウ 多様な見方や考え方のできる事柄を扱う場合には、特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないもの。

○道徳性の育成

- ・道徳性の育成は、資質・能力の三つの柱全てに関わる、教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の教育と社会をつなぐものである。

○内容の改善

- ・いじめ問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえ体系的に改善した。

※体系的とは、系統的、統一的にということであり、義務教育の9か年を通して連続した指導を心掛けることが大切である。

《小学校に追加された内容》

- ・第1・2学年→「個性の伸長」、「公正、公平、社会正義」、「国際理解、国際親善」
- ・第3・4学年→「相互理解、寛容」、「公正、公平、社会正義」
- ・第5・6学年→「よりよく生きる喜び」

《中学校の内容の変更点》

- ・新しく追加された内容はないが、内容項目の組替えや統合がある。

○問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫する。

○数値評価ではなく、児童生徒の道徳性に係る成長の様子を把握する。

※評価の詳細については、「道徳科の評価」参照

道徳科の評価

道徳科では、評価が実施される。

学校における評価とは、児童生徒にとっては、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものである。

教育において指導の効果を上げるためには、指導計画のもとに目標に基づいて教育実践を行い、指導のねらいや内容に照らして児童生徒の学習状況を把握するとともに、その結果を踏まえて、学校としての取組や教師自らの指導について改善を行うことが重要である。

1 評価の意義

- 児童生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。
- 創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童生徒の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること。

2 道徳科の評価

児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすように努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

3 道徳科の評価の在り方

- 数値による評価ではなく、記述式とすること。
- 個々の内容項目ごとによる評価ではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
- 他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて、認め、励ます個人内評価として行うこと。
- 学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。
- 発達障害のある児童生徒が抱える学習上の困難さの状況等を踏まえた指導及び評価上の配慮を行うこと。
- 調査書に記載せず、入学者選抜の可否判定に活用することのないようにすること。

4 道徳科では児童生徒の何を評価するのか

- 児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか。
 - ・道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠や、その時の心情を様々な視点から捉え考えようとしている。
 - ・自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。
 - ・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。
- ※発言や感想文、質問紙の記述等から見取る。

○道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。

- ・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。
- ・現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している。
- ・道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を深めている。
- ・道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え考えようとしている。

5 評価のための具体的な工夫例

- 児童生徒の学習の過程や成果などの記録を計画的にファイルに蓄積する。
- 道徳性を養っていく過程での児童生徒自身のエピソードを蓄積する。
- 作文やレポート、スピーチやプレゼンテーション等具体的な学習の過程の記録を蓄積する。
- 児童生徒が行う自己評価や相互評価を蓄積する。

6 組織的、計画的な評価の推進

- 学習評価の妥当性、信頼性の担保が重要である。
- 校長及び道徳教育推進教師のリーダーシップのもと学校として組織的・計画的に取り組む。

《具体例》

- ・学年ごとに、評価のために集める資料や評価方法等を明確にしておく。
- ・評価結果について教師間で検討し、評価の視点などについて共通理解を図る。
- ・評価に関する実践事例を蓄積し、共有する。
- ・道徳科の指導記録を分析し検討するなどして指導の改善に生かす。
- ・日常的に授業を交流し合い、全教職員の共通理解のもとに評価を行う。
- ・学級担任以外からの意見や所感を得るなどして、児童生徒を多面的・多角的に評価したり教師自身の評価に関わる力量を高めたりする。

多様な指導方法の例

ここに示した指導方法は、独立した指導の「型」を示しているのではない。それぞれに様々な展開が考えられ、例えば、読み物教材を活用しつつ問題解決的な学習を取り入れるなど、それぞれの要素を組み合わせた指導も考えられる。

【登場人物への自我関与が中心の学習】

教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的諸価値の理解を深めることにおいて効果的な指導方法である。児童生徒が読み物教材の登場人物に自分自身を映し出して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深める。

《教材》

児童生徒が登場人物に共感し自分自身を映し出しやすい教材

《学習指導過程と指導の工夫》

導 入	<p>本時の学習への関心・意欲を高めたり、道徳的価値への意識を向けたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の中心となる道徳的価値に対する関心をもつ。 ・教材に興味や関心をもつ。 ・自分の考えを素直に語ろうとする気持ちを高める。 ・友達との対話に前向きな意欲をもつ。
展 開	<p>教材から登場人物の判断や心情を想像し自分との関わりで考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物への共感を促す発問 ・登場人物の判断や心情を類推する発問 ・児童生徒の発言を整理したり、深く考えさせたりする発問 ・自分の生き方について考えを深める発問 <p>【発問例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうして主人公は〇〇という行動を取ることができたのだろうか。 (または、できなかったのだろうか)。 ・主人公はどういう思いをもって△△という判断をしたのだろうか。 ・自分だったら主人公のように考え、行動することができるだろうか。 <p>【指導の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分自身を登場人物に投影しやすいように役割演技を取り入れる。 ・自分自身を登場人物に投影しやすいように吹き出しを用いるなどしてワークシートを工夫する。 ・ペアやグループなど話合いの仕方を工夫する。
終 末	<p>本時の授業を振り返り、学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師による説話 ・感想を聞き合ったり、ワークシートへ記入したりして、学習で気付いたこと、学んだことを振り返る。 ・これまでの自分を振り返り、本時の学習を今後どのように生かすことができるかを考える。 ・教師が児童生徒の作文を読んだり、詩を朗読したりするなど本時の学習に余韻をもたせる工夫も考えられる。

《評価》

○児童生徒の学習状況の評価

- ・主人公に自分自身を映し出して自らの気持ちや考えを語っているか。

- ・友達との対話や全体での話し合いでの他者の多様な感じ方や考え方を受け止め、自分の感じ方や考え方を明らかにしたり、新しい価値観に気付いたりしているか。

○道徳性に係る成長の様子

- ・友達との対話や全体での話し合いを通して、多面的・多角的な見方へと発展しているか。

【問題解決的な学習】

児童生徒一人一人が生きる上で出会うであろう様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

《教材》

多面的・多角的な思考を促す「問い」の設定が可能な教材

《学習指導過程と指導の工夫》

導 入	<p>問題の発見や道徳的価値について問題意識をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材や日常生活から道徳的な問題を見付ける。 ・自分たちのこれまでの道徳的価値の捉え方を想起し、道徳的価値の本当の意味や意義への問いをもつ。 <p>【授業の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ねらいに関わる新聞記事や児童生徒の作文、事前にとったアンケートの結果など、児童生徒が問題を自分のこととして捉えることができるような資料を提示する。
展 開	<p>教材から多面的・多角的に考えたり話し合ったりして、問題の解決についての自分の考えを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道徳的な問題について、グループなどで話し合い、なぜ問題となっているのか、問題をよりよく解決するためには、どのような行動を取ればよいのかなどについて考える。 ・自分だったら問題場面でどう行動するのか、その根拠も踏まえて考え、話し合う。 <p>【発問例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ここでは、何が問題となっているのですか。 ・なぜ〇〇（道徳的価値）は大切なのでしょうか。 ・どうすれば△△（道徳的価値）は実現できるのでしょうか。 ・同じ場面に会ったら自分ならどのように行動するのでしょうか。 ・なぜそのように行動するのでしょうか。 ・よりよい解決方法にはどのようなものが考えられるのでしょうか。 <p>【授業の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解決策など、同様の考えをもつグループでの話し合いでは、なぜその方法がよいのかといった根拠などを幅広い視点から考えさせる。 ・全体での話し合いでは、どちらを選ぶのかやどちらが優れているのかより、様々な立場から見える問題の姿について理解し、その上でよりよい解決策について話し合うことができるようにする。 ・ワークシートは、自分の考えの根拠を明確にしたり、話し合いの中での考えの変化や新たな気づきを記録したりすることができるようにする。
終 末	<p>本時の学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を振り返り、感想を聞き合ったり、道徳的な問題について自分の考えをワークシートにまとめたりする。 ・これまでの自分を振り返り、本時の学習を今後どのように生かすことができるかを考える。

《評 価》

○学習状況について

- ・道徳的な問題意識をもっている。
- ・道徳的な問題場面の解決策について、自分なりの考えをもっている。
- ・グループや全体での話し合いでは、自分と異なる考えも心を開いて聞き、道徳的価値の理解を深めている。
- ・グループや全体での話し合いを通して、新たな道徳的価値の発見や新たな問いを見付け出そうとしている。

○道徳性に係る成長の様子

- ・グループや全体での話し合いを通して、多面的・多角的な見方へと発展しているか。

【道徳的行為に関する体験的な学習】

役割演技などの疑似体験的な活動を通して、道徳的価値を実感しながら理解を深めるため、道徳的価値の実現するための資質・能力を養う。

《教 材》

道徳的価値について、心情と行為の齟齬や葛藤の場面がわかりやすい教材

《学習指導過程と指導の工夫》

導 入	道徳的価値への関心を高めたり、教材への興味を高めたりする。 ・教材や日常生活から道徳的な問題を見付ける。 ・日常生活の中で大切さがわかっているにもかかわらず実践できない道徳的行為を想起し、問題意識をもつ。
展	教材から問題場面を捉え、役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動を通して多面的・多角的に考える。 ・道徳的行為を実践に移すためにどのような心構えや態度が必要かを考える。 ・道徳的価値が実現できない状況が含まれた教材で、何が問題となっているかを考える。 ・ペアやグループをつくり、実際の問題場面を役割演技で再現し、登場人物の葛藤などを捉える。 ・実際の問題場面を設定し、道徳的行為を体験し、その行為をすることの難しさやよさなどを自分との関わりで捉える。 ・役割演技や道徳的行為を体験したり、それらの様子を見たりしたことをもとに、道徳的価値の意味や実現するために大切なことを考える。 ・同様の新たな場面を提示して、取り得る行動を再現し、道徳的価値を実現するために大切なことを体感することを通して、実生活における問題の解決に見通しをもたせる。
開	【役割演技の際の教師の声かけの例】 演じた児童生徒に対して ・「演じてみてどんな気持ちだったか」 ・「何が問題だと思ったか」 ・「難しいと思ったところはどこか。なぜ難しかったのか」 ・「よいと思ったところはどこか。なぜよいと思ったのか」 演技を見ていた児童生徒に対して ・「演技を見ていてどう思ったか」 ・「何が問題だと思ったか」 ・「どうして思ったとおりに行動できなかったのか」 ・「自分だったらどうするか」

	<ul style="list-style-type: none"> ・「どう行動すればよかったのか」 <p>【授業の工夫】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演技する児童生徒が役割の状況や立場を実感しながら演技したり、見ている側がその役割を明確に理解したりできるよう、演技者がお面やネームプレートを付けるなど、小道具を工夫する。 ・場面絵や小道具を置くなどして臨場感を高める。 ・役割の一部を担当が行って、児童生徒の道徳的価値に対する考えや気づきを引き出す方法も考えられる。
終末	<p>本時の学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師の説話 ・本時の学習を振り返り、感想を聞き合ったり、道徳的な問題について自分の考えをワークシートにまとめたりする。 ・これまでの自分を振り返り、本時の学習を今後どのように生かすことができるかを考える。

《評 価》

○学習状況について

- ・役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動などから、道徳的価値を実現することのよさや難しさに気付いている。
- ・役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動などから、人によって様々な感じ方や考え方があることに気付いている。
- ・役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動などを基に、道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と話し合う中で、道徳的価値の理解を深めている。

○道徳性に係る成長の様子

- ・グループや全体での話し合いを通して、多面的・多角的な見方へと発展している。

道徳科への学校の取組

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う

(学習活動)

道徳的諸価値についての理解を基に自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え自己の(人間としての)生き方について考えを深める

(よりよく生きるための資質・能力)

道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

指導体制の確立

校長が道徳教育の方針を明確にし、そのリーダーシップの下、全教師が協力して道徳教育を展開するため、道徳教育推進教師を中心とした推進体制を確立する。

道徳教育全体計画の作成

全体計画の別葉の作成

年間指導計画の作成

「考え、議論する道徳」へ

- ・主体的に考える
- ・自分との関わりで考える
- ・様々な側面や視点、立場から考える
- ・多様な感じ方、考え方と出会い、交流する
- ・自分と異なる意見を持つ他者と意見を交流する

多様な指導方法を取り入れた指導例

登場人物への自我関与が中心の学習

問題解決的な学習

道徳的行為に関する体験的な学習

※これらは、独立した「型」を示しているわけではない。それぞれの要素を組み合わせた指導も考えられる。

評価

児童生徒の成長を見守り、努力を認めたり励ましたりすることによって児童生徒が自らの成長を実感し更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指す

- ・児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握する。
- ・数値による評価は行わない。
- ・学習活動において児童生徒が多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりで深めているかといった点を重視する。